
少女落ち葉。

愛華龍蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女落ち葉。

【Nコード】

N2617N

【作者名】

愛華龍蓮

【あらすじ】

落ち葉のような私が変わった・・・

あなたのおかげで・・・

ことの始まり。

私はあなたを怨みます。

でもあなたは人に恨まれるようなことはしていません。

私はあなたを殺します。

でもあなたは殺されるようなことはしていません。

あなたは私を裏切りました。

でもあなたのやった行為は悪意じゃない。

あなたは私を怨みますか？

怨んでもらってもかまいません。

私は・・・あなたを・・・

私は小さい頃存在が薄かった・・・

いや・・・

薄いというよりも・・・

私は道に落ちている枯葉のような存在だった。

道に枯葉があるくらいなんとも思わない。

触ってみようとも思わなければ見ようとも思わない。

私は大きな木においしげっている一つの葉っぱだったのに・・・

落ちてしまった。

一つだけ孤立した・・・そんな存在。

私は見れ貰わない楽しさも苦しさも知っている。

だから私は毎日石や落ち葉を見ているのか好きだった。

私と同じ物を見ているのが・・・好きだった。

もしかしたら石や落ち葉達を見て、なんの意味もなく消えうせるハズだった彼らを

見るという行為で救い、いつか私にも救いがあると信じたかったのかもしれない。

これは私の自己満足であって、何の意味もないことは知っていたけど・・・

・・・？

遠くで人の声がしたような・・・

「あっ！ ああっとっ！ 危ないっ！ ！！！！」

いきなり後頭部に震動が走る。

さほど痛くはなかったが・・・私は顔面から地面に倒れた。

「・・・・・・・・痛い・・・・」

私は地面から顔を上げ声のした方を見た。

「ええ・・・・・・・・と・・・・・・・・ごめんなさい。大丈夫？」

私よりも少し背の高い男の子。

見覚えのある顔・・・・。

少し考えて思い出した。

同じ幼稚園だ・・・。

顔くらい知っていて当然だった。

「・・・・・・・・」

私は無言で立ち上がってその場から離れようとした。

人とかかわり方なんて分からないし、居ても何も言えない。

背を向けて歩こうとした時・・・後ろから手を掴まれた。

「ああ・・・と・・・」

同じくらいの歳の子が私に触れるなんて初めてだった。

私はいるけど、いない。

そんな存在だったから・・・

触れられることもなかった。

「・・・痛い・・・」

搦んでる腕が痛かった訳ではない・・・

いつのまにか肩にすり傷ができていた。

血が服から染みでてくる・・・

「ぬわっ、ど・・・どうしよう。」

男の子は慌てているようすだった。

私はそれを呆然と見ていることしかできなかった。

その辺にいる石ころのように・・・

「ええっ！きやあっ！！！」

何を考えたのか男の子は私をお姫様抱っこ……のような状態……

あまりにも抱き方が不格好だったのでお姫様だっこではなかった・

そんな状態で近くにあった水道の蛇口まで連れてってくれた。

あんなにも声を出したのは久しぶりだった……。

私は動揺しながらも・・・

少し幸せを感じた気がした。

私は今でも覚えている。

肩の痛さと・・・

水の冷たさと・・・

貴方に抱っこしてもらった・・・

貴方の温かなぬくもり。

ことの始まり。(後書き)

新しい連載です♪

いやあ W
W
W

下手だね W

幸せは水の底へと沈んでいく。

あれから貴方は私を貴方の沢山の仲間のもとへ連れて行ってくれた。

連れてって貰っても私は恥ずかしくてうまく話すことはできなかったケド・・・

私の頭にボールを当ててしまったらしい子が何度も謝ってきた。

「大丈夫ですから、」私はこうとしか言えなかった。

私は貴方に会ってからずいぶんと明るくなった。

人と話すようになったし、

外に落ち葉を見に行くこともなくなった。

他のこと話せるようになって私も私は貴方から離れることはなかった。

貴方が一番心休まる人だったし・・・

貴方は誰よりも優しかった。

この頃からきつと私は貴方のことが好きだった。

幸せな日々だった・
・

そんなある日・
・
・。

「俺・・・君のことが好きだ」

貴方がずっと目で追っていた少女に告白するところを見てしまった。

悲しくはあったけど・・・

ある意味悲しくはなった・・・

貴方の一番好きな人が私じゃなかっただけ・・・

ただそれだけだった。

それだけで終わればよかった・・・

「ごめんなさい。」

私は少女の口からそう発しられたように聞こえた。

あんなにも優しい人が断られるハズがない・・・

私の聞き間違い・・・

きっとそう・・・

「その・・・ダメな理由とか・・・ある？」

これ以上聞かないで。

これ以上自分を苦しめないで。

これ以上彼を傷つけないで。

お願い・・・

お願いだから・・・

「だって・・・」

今からでもここを去ろうか・・・

ここにるのは辛い・・・

私の問題より、こういう場面を私は見てはいけないんだ・・・

「だって・・・あなた・・・ずっとあの子と一緒にいるでしょ・・・

」

少女はあきらかに私を指差してる。

少女は気づいていた。

私がここにいることを・・・

聞いてはいけない話を聞いてしまったことを・・・

そして私は知ってしまった。

貴方が少女に断られてしまったのは・・・

私の存在のせい・・・

「・・・いつから居たの？」

貴方は私を軽蔑してもいいはず・・・

だって私はこんな会話を盗み聞きしてたんだもん・・・

でも・・・

貴方はあくまでも私に優しい顔で優しく聞いてくれた・・・

それが・
・
・

また苦し
かった。

「ゴメンなさい。」

私はその場から走って逃げた。

逃げて。

逃げて。

突然
・
・
・
・

逃げて。

蹴っていたハズの地面が消えた・
・
・

「ぎゃあっ――！！！！！！」

私は・
・
・

深い。

深い水の中へと落ちていった。

そして少女は夢を見る。

つい最近約束した・・・

少年との約束の日の夢を・・・。

幸せは水の底へと沈んでいく。(後書き)

はい・・・

完全に急展開ですね、

ていうより文才なさすぎるでしょ(＜|＞。)

貴方との約束。

光の见えない真っ暗な世界。

ここは私一人の世界。

貴方もいなければ貴方の友達も居ない。

暗い。

暗い。

闇の中。

私はそっと瞳を閉じる。

いや・・・

もしかしたら私はもう瞳を閉じていたのかも・・・

水の中にいるような・・・

私は浮遊し続けている。

ふわり。

ふらり・・・。

今までの記憶は全部偽物で・・・本当は私はクリオネか何かだったのかしら？

ここは深い深い水の中で・・・

私に届く光さえなくて・・・。

私はきつと食事もとれずに死んでいくの・・・

今はきつとつかの間の幸せ・・・

偽物の・・・貴方と過ごした記憶があつて・・・

私はその記憶を私の都合のいい方向に勝手に変えて楽しむの・・・

私は今・・・きつと幸せ。

ふらり・・・。

ふわり。

・
・
・
はあ
・
・
・

おかしいな
・
・
・

記憶の中の貴方が私に語りかけてきてる
・
・
・

私にとって貴方は眩しすぎる・・・。

この深い深い闇夜も照らす・・・

止めて・・・

照らさないで・・・

私の・・・

一人の世界を壊さないで・・・

私は・・・ひっそりとここで死ねれば・・・それでいい・・・

誰の目にも触れず・・・

消えたい・・・

貴方はずるいよ・・・

私の世界を明るくして・・・

明るくなったら消えちゃうんでしょ？

ほら・・・

私の世界をまた明るくするんだ・・・

「・・・具合大丈夫・・・？」

・・・。

寝ている男の子に話しかけている私がいる・・・。

「ごほ．．．ぐふん．．．。大丈夫だよ．．．」

あれは．．．

ああ．．．これは偽りの記憶か．．．

たしか貴方が少し前に風邪をひいたんだよね．．．。

「全然・・・大丈夫そうに見えない・・・」

私は悲しそうな顔をしている・・・。

そんなに貴方のことが心配だったのか。

「・・・ごめんね、」

あゝあ・・・目に涙溜めちゃって・・・

そんなに苦しいのか・・・

「風邪・・・なんでしょ・・・？」

そうそう・・・

あなりにも苦しそうだったから私は貴方が大きな病気にかかったと

思ってたんだっけ・・・

「・・・風邪・・・だと思っ・・・たぶん・・・」

私が不安な時に限って貴方は曖昧な返事をするんから・・・

この記憶が偽物だったとしても・・・

私が不安になるのも当たり前じゃない・・・

「・・・死なないよね・・・」

あははは・・・

私こんなこと言ったのかなあ？

具合が悪いだけで死ってえ・・・

極端すぎ・・・。

「死んだりしないって、」

そりゃ貴方も苦笑いしちゃいますよね・・・。

「ねえ・・・約束・・・しよ？」

あれ・・・？

こんな記憶ないぞ・・・？

そんなこと言っただけ？

「約束……？
ど……ん……げほっ！
ごほっ！」

思いだした……。

この後貴方は病大が悪化して・・・

救急車で運ばれるんだ・・・。

そして・・・

「・・・大丈夫って言ったのに・・・」

泣いている私がいる。

ベットには貴方がいて・・・

私の頭に手をのせた・・・

「ごめんね・・・」

・
・
・
・
・
・
○

ずっと前だったような
・
・
・
○

すごく最近だったよな
・
・
・
○

曖昧な記憶・・・。

「約束してよっ！」

私がこんなにはっきり物を言うなんて珍しい・・・。

私は怒っていたのか・・・？

今の私にはよく分からないなあ・・・

「・・・。」

貴方は真剣な顔をしている・・・。

「ぐす・・・居なくなっちゃだあああああ」

このタイミングでいきなり私が号泣しだした。

なんとも醜い顔・・・

貴方は・・・

啞然としてる・・・

まあ貴方からすればまだ生きてるわけだし・・・

どう対処していいかわかりませんよね、

「ええ……と……ええ？」

あゝあ……困ってる……

何やってんだよ・・・私・・・

「ひっく・・・ぐす・・・ひっく・・・」

私ってこんなに泣いてたんだ・・・

やっぱり・・・

私は貴方を困らせてばかりで・・・

「・・・わかった・・・」

貴方は何か呆れたような・・・

覚悟したような・・・

そんな顔でこう言った。

「俺は絶対に離れないよ」

きつと貴方に深い意味はなかったんでしょ？

でも・・・知ってるんだあ・・・

この偽物の記憶の私は・・・その言葉が・・・

嬉しかったんだ・
・
・

すごく・
・
・

すごく・
・
・

でも・・・

私は素直になれなくて・・・

「約束だよ？　いなくなったら・・・ぐす・・・」

「・・・居なくなったら？」

「居なくなったら・・・」

そんな事を言ったケド・・・

居なくなったらの後なんて考えてなかった・・・

「・・・あつ 約束破ったら針千本飲ますってのは？」

指きりげんまんウソついたら針千本飲ます・・・

本当に飲ませるはずなのにねえ・・・

「不滿？」

「不満なんかじゃあ」

不満なんかじゃなかった・・・

ただ素直な喜び方を知らなかっただけ・・・

「よしっ！ 命かけてもいいぞっ！」

「あはは、絶対？」

「絶対かどうかはあゝ・・・まあ、分からないな」

真面目な話をしてたハズなのに・・・

いつの間にか私と貴方は楽しそうに話している・・・

「じゃあ約束破ったら殺してもいいの？」

「いいよ。でも約束破らないから殺されないけど」

まっ
たく・
・
・

真面目に話してたんじゃないのかあ？

もうお
・
・
・

どうしようもない二人だなあ、

幸せだった・・・

本当の本当に幸せだった・・・

貴方は翌日には家に帰っていたし、そのまた次の日は外にも少し出ていた。

幸せな日々が続くはずだった・・・

それなのに・・・

私は貴方の邪魔でしたね・・・

私のせいで・・・貴方が傷つくことになった・・・

ごめんなさい。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

光で溢れていた水の中がまた・・・

暗闇へと戻りだす・
・
・

そこへ・・・

貴方が飛び込んできた。

私の腕を掴んで一生懸命地上へと上げようとする・・・

冷たい・・・

全身が冷たい水で凍えてることを知った・・・

痛い・・・

彼に腕を強握られているので痛い・・・

これは夢なのか・・・記憶なのか・・・現実なのか・・・

全てが分からなくなって・・・

私の意識はまた眠った
・
・
・
。

私は貴方を・・・

・・・苦しい・・・

次に私の意識が戻った時に一番最初に感じた感情。

体がくらくらして・・・視界が明るくて・・・

点滴なのか腕にはたくさんのチューブが刺さっていた。

私が目を開けると父と母が驚いた顔で私を見てきた・・・

両親は私に抱きつくとき、苦しいのに私を強く強く腕で圧縮する・・・

・・・これはどういう状況なんだ・・・？

なぜ両親は私に抱きつく？

なぜ私はベットで寝ている？

そういえば・・・

私は・・・

そんな場所にいた気がする・・・

暗い。

暗い。

私が一人で死を選ぼうとしたら・・・

貴方がきたんだあ・・・

貴方はどこ？

貴方は？

あれ？

辺りを見回す・・・

私が見ている世界が夢なのか現実なのか・・・わからないけど・・・

この世界のこの場所には貴方は居ない・・・

貴方はどこに行ったの・・・？

私は何度も何度も部屋を見回す・・・

そんな時・・・

「どうしてうちの子なのよっ！……！！」

部屋の入り口で叫んでいるのは・・・

貴方の母親。

どうして叫んでるの？

貴方の母親は私に凄いいんまぐで近寄ってくる・・・

私は貴方の母に胸倉を掴まれて・・・

強い殺意を感じた・・・

貴方の母親は私を殺したがってる・・・

なんて対応していいかなんて分からない・・・

分からないけど・・・

もう・・・

考えるのもめんどくさいや・・・

私は目を閉じる・・・

そして全身の力を抜く・・・

意識はある・・・

でも・・・

私は気絶したフリをした・・・

本当に気絶できればいいんだけど・・・

それは意識的にできるもんじゃない。

全てをシャットアウトしたいのに音だけは繊細に聞こえてくる。

「どうしてあんな達の子なのよ・・・」

今度は私の両親に言っているらしい。

「・・・すみません。」

私の両親は貴方の母親に謝ってるのか・・・？

「うちの子・・・が・・・うちの子が何でっ！」

また貴方の母親は気が荒くなってる・・・

どうしたのだろう？

「うちの子が何で死ななくちゃいけないのよっ！……！」

・
・
・
・
。

私は意識を失ったのだろうか・
・
・

思考停止している・
・
・

今なんて言った？

死？

そんなわけではない・・・

貴方はあの酷い風邪は治ったし、貴方が死ぬ理由がない。

理由がない
・
・
・
・
・

理由がない
・
・
・

私が水の中にいたとき・
・
・

理由がない・
・
・？

最後に見たのは・・・

現実だった・・・？

貴方が私の腕を掴んで地上に運ぼうとしてくれてた・・・

あの光景・
・
・

あれは現実・
・
・？

じゃあ・・・

貴方は本当に・・・

死んだの？

そして・・・

貴方が死んだのは・・・

私のせい？

また私のせい？

また
・
・
・
・
・
・

また
・
・
・

あははははははは
・
・
・

私という存在が
・
・
・

もういっ。
い。

もういっ
や・・・

これもきつと夢だし・・・

静かに眠れば・・・

それでいいさ・・・

おやすみなさい。

私は意識の失いかけのわずかな時・・・

私はこの病院の屋上にいて・・・そつと飛び降りる・・・

そんな光景を見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2617n/>

少女落ち葉。

2011年10月7日19時32分発行